

ベトナム中部出土土器棺の型式学的研究

鈴木 朋 美

1. はじめに

土器棺⁽¹⁾ 葬は後期新石器時代から初期鉄器時代の東南アジア地域で広く確認できる埋葬習慣である。多くの東南アジア研究者たちは、この土器棺葬を南シナ海に拡散していったオーストロネシア語族の埋葬文化に結びつけて考えている (Bellwood 1997)。

東南アジアの中でも、特に多くの土器棺墓が発見されているのがベトナムである。ベトナム考古学界では、前述の研究者たちの意見に対し土器棺葬の担い手がオーストロネシア語族であるということに関しては同意しているものの、土器棺葬の発祥の地がベトナム中部にあると考えている。また、ベトナム中部の初期鉄器時代文化をサーフィン Sa Huynh 文化と呼称し、土器棺葬をその指標としている。

しかし、サーフィン文化に関する研究は未だ発展途上にあり、土器棺葬という指標以外は研究者間で定義に差異がある。また、文化の定義について詳細な検討が行われないうまま、遺跡から多くの土器棺が新たに出土している。しかし単に土器棺葬という言葉だけが独歩し、今やサーフィン文化の範疇には多様な形態の土器棺が含まれている。

筆者は上記の事実に触れ、サーフィン文化の定義を明確にするために東南アジアにおける土器棺葬文化を改めて考える必要性を感じた。しかし、東南アジアではベトナムに限らず様々な形態の土器棺が各地で出土している。したがって本論では土器棺が多く、かつ集中して出土が確認されるベトナム中部を対象とし、土器棺の形態にバリエーションが生じる要因について論ずる。

2. ベトナムの土器棺葬とサーフィン文化

2-1. サーフィン文化研究

鉄器時代のベトナム中部では、サーフィン文化と呼ばれる文化が設定されている。サーフィン文化とは、「ベトナム中部の海岸や川沿いに形成された砂丘上に立地する甕棺墓群を最大の特徴とし、それらに「土器、鉄器、貴石製（瑪瑙、カーネリアン、ネフライト）やガラス製の装身具、青銅器」が副葬されることを特徴とした文化とされている（山形 2007：97-98）。また、「甕棺を指標とする海洋性の高い文化」と明確に指摘されている（グエン・チュ 2010：14）。一般に、

サーフィン文化はのちにチャンパ王国となる初期国家の基盤を担った文化と見なされている。サーフィン文化の遺跡は主に沿岸部に集中し、その分布域は、北はトゥアティエンフエ Thua Thien Hue 省フエ Hue 市から南はカインホア Khanh Hoa 省カムラン湾と言われている（山形 2007）。しかし、現在のベトナムの考古学界ではより広い分布域が考えられており、トアティエンフエ省よりさらに北のクアンビン Quang Binh 省から南部のホーチミン市南に位置するゾンカーヴォ Giong Ca Vo 遺跡までもがサーフィン文化に含まれている（グエン・チウ 2010）。

サーフィン文化の研究はフランス人によって着手された。20世紀初頭にヴィネ、パルマンティエが調査を行った（Parmentier 1925）結果、サーフィン文化は土器棺を豊富に伴う文化として著名になった。また1960年代にはソルハイムが東南アジア島嶼部（フィリピン、ボルネオ）の先史時代の土器との関連を指摘し、改めて知られることになった（Solheim ed. 1961）。ベトナム戦争終結以降（1975年～）、ベトナム人研究者によりロンタイン段階、ビンチャウ段階という発展段階を辿り、サーフィン文化に先行する先サーフィン文化という概念が作り出された（Ha Van Tan 1983）。

サーフィン文化に関する最近の問題意識として、その起源に研究者たちは注目している。ベトナム考古学界では、石器や土器の文様が先サーフィン・ロンタイン段階のものに類似するという理由から北中部クアンビン省の後期新石器時代のバウチョー文化が起源であると認識されている。しかし現時点でベトナム最古の土器棺はロンタイン遺跡のものである（Chu Van Tan, Dao Lin Con 1978）。ロンタイン遺跡では金属器が出土しないこともあり新石器時代に属すと考えられ、土器棺の起源を新石器時代以前に求められるのではないかという見解がなされている（山形 2007）。

2-3. Vu Cong Quy によるサーフィン文化の進化論

ヴァー・コン・クイー Vu Cong Quy は著書“Van Hoa Sa Huynh (1991)”にてベトナムにおける

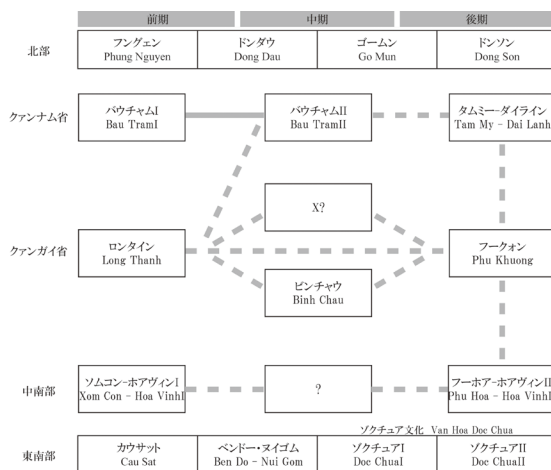


図1 ヴァー・コン・クイーのサーフィン文化進化モデル（Vu Cong Quy 1991 を改編）

金属器時代の文化の進化と関連性についてモデルを提示した (Vu Cong Quy 1991)。ヴァー・コン・クイーの北部・中部・南部の文化をすべて関連付ける見解は、戦後のベトナムにおける考古学のナショナリズムの役割を彷彿とさせるものである。しかし、このモデルのうちサーフィン文化のみに的を絞れば、ヴァー・コン・クイーの研究はサーフィン文化の体系的研究の先駆けとして評価できる。ベトナムにおける土器棺葬文化理解のためにサーフィン文化の展開に関する体系的考察について触れておきたい。

ヴァー・コン・クイーは各地域の遺物を手掛かりに遺跡の編年を設定しサーフィン文化を初期、中期、後期の3段階に分割した。クアンガイ省ではロンタイン、チュオンサー遺跡を初期に、ビンチャウ遺跡を中期に、フークォン遺跡を後期とした。クアンナム省ではバウチャムⅠを初期に、バウチャムⅡ遺跡を中期に、タムミーとダイライン遺跡を後期に設定した。

このクアンガイ・クアンナム省における遺跡編年において地域間の影響を考慮した結果、サーフィン文化の初期にロンタイン遺跡からの影響が北側のバウチャムⅠ遺跡に表れたというモデルと、後期にフークォン遺跡の影響がタムミー、ダイライン遺跡に表れたというモデルの2つが提示された。

しかし、この文化発展モデルの欠点は、3つの発展段階に分けた理由が明確でない点である。遺跡間の前後関係は各遺跡の発掘者の意見に依拠している部分があり、型式編年などを根拠としたモデル設定ではない。裏付けとなる分析をさらに行う必要があるモデルと言える。

2-4. 土器棺の形態に関する研究

土器棺葬において、不可欠かつ最大の特徴と言えるのが土器棺である。しかし近年まで土器棺の形態に関する研究はほとんど行われてこなかった。特に発掘報告において土器棺の形態を示す名称は存在していたものの、細かい分類基準などは言及されなかった。しかし、2000年以降から徐々に形態に着目した研究が行われてくるようになった。グエン・ティ・ホアイ・フォン Nguyen Thi Hoai Huong は、大きさおよび形態に着目し、それらの違いについて以下のように言及している (Nguyen Thi Hoai Huong 2008)。

- ・ Mo chum : 高さは50cm～100cmで、直径⁽²⁾が40cm～70cm
- ・ Mo vo : mo chum より小さい。球形を呈し口縁が広く開く。丸底を持つ。直径⁽³⁾35cm～50cm未満。
- ・ Mo noi : 口縁径20cm～30cm。日常用土器の転用か、それとも埋葬用に製作されたものかは不明。

さらに、土器棺の形式に関しては以下の名称を紹介している。

- ・ Hình trụ (柱形)、Hình trung (卵形)、Hình trái đào (桃形)、Hình cầu (球形)

しかし、グエン・ティ・ホアイ・フォンは、上記の4形式について詳しい解説を行っていない。

一方グエン・チウ Nguyen Chieu はグエン・ティ・ホアイ・フオンの形式分類とは別の基準で土器棺を4形式に分類し、以下のように説明⁽⁴⁾している。

- ・第1形：柱形。胴部は垂直に立ち上がり、口縁部で外反する。丸底。口縁部の内面に蓋受け用の凸帯が巡る個体や、外面に凸帯が巡る個体もある。さらに細別すると、肩部がない個体と肩部がある個体に分けられる。大きさは高さ85～95cm、径50～55cm⁽⁵⁾程度。
- ・第2形：卵形。3タイプに細分される。1つ目は口縁が外反し、肩部が窄まり、やや張る胴部から丸い底部へと続くタイプ。2つ目は頸部が窄まり、肩部で角をなし、短い胴部と丸底のタイプ。3つ目は頸部が鈍角で、胴部が胴径より長く、肩部が張り底部で窄まり尖底を呈すタイプ。
- ・第3形：桃形。ゴーマーヴォイ遺跡出土の4基のみが当てはまる。口縁は外反し、外面には幅広の沈線が巡る。頸部は屈曲し、肩部は膨らみ胴部は丸く底部に向かって窄まり尖底になる。大きさに統一性がない。
- ・第4形：鍋形。他の土器棺と共伴し、ベトナム中部でも南域に分布。小児用、改葬用、火葬用と考える研究者もいる。(グエン・チウ2010)

以上のような形態に関する分類は試みられてはいるが詳細な検討は行われていない。また、具体的な図を用いての説明がないのが欠点である。

2-6. 日本人研究者による型式学的研究

ベトナム国内では型式学的研究は本格的に着手されていないものの、日本人考古学者による研究はベトナムの土器棺型式学の先駆けである。特にベトナムで土器棺墓遺跡を調査した山形眞理子や西村昌也らによる土器棺の編年は基礎的研究と言える。山形はビンイェン Binh Yen 遺跡を発掘し、口縁部内面をめぐるタガ（蓋受け）は古い様相を示すという見解を示した（Yamagata 2006、山形2007）。西村はアンバン An Bang 遺跡を発掘し、墓坑の切り合い関係から遺跡内での土器棺の型式編年を提示した。一遺跡内での型式編年ではあるが、山形と同様に時代が下るにつれタガのある土器棺から無い土器棺へと変化するという解釈である。さらに、西村はクアンナム省内でアンバン遺跡、クエロック Que Loc 遺跡、タビン Tabhing 遺跡が同時期に形成され、タムミー Tam My 遺跡とハウサー Hau Xa 遺跡がアンバン遺跡と同時期、またはわずかに先行する可能性を示唆している（Nishimura 2004）。

3. 問題提起

土器棺葬文化の初現地問題は、サーフィン文化研究にとって大きな論点である。また、土器棺葬に見られるバリエーションをどのように解釈するかという問題もある。そこで問題の中心であるベトナム中部の土器棺葬に関して体系的な研究を行い、どのように発展・変化していくかを追

う必要がある。

ヴェー・コン・クイーの中部のサーフィン文化発展モデルの発表以降、新たな発掘が行われ資料が増加したが、体系的研究はほとんど行われてこなかった。近年になってようやく、グエン・チュウやグエン・ティ・ホアイ・フンらのように土器棺の型式に着目した研究が行われるようになってきた。しかし、彼らの研究は詳細な分析を行っておらず、その型式分類も大まかなものであった。

以上の問題点を踏まえ、筆者はインドシナ半島東沿岸における土器棺について再考察の時期を迎えたと判断した。今、サーフィン文化という垣根を一旦取り払い、まずはベトナムで見られる土器棺を体系的に分析すべきである。したがって本論では、インドシナ半島東沿岸のベトナム中部に集中して見られる土器棺について体系的な分析を行うことでその差異を明らかにし、差異が生じる要因と中部の土器棺の発展過程を明らかにすることを目的とする。

4. 研究対象

4-1. 対象地域【図2】

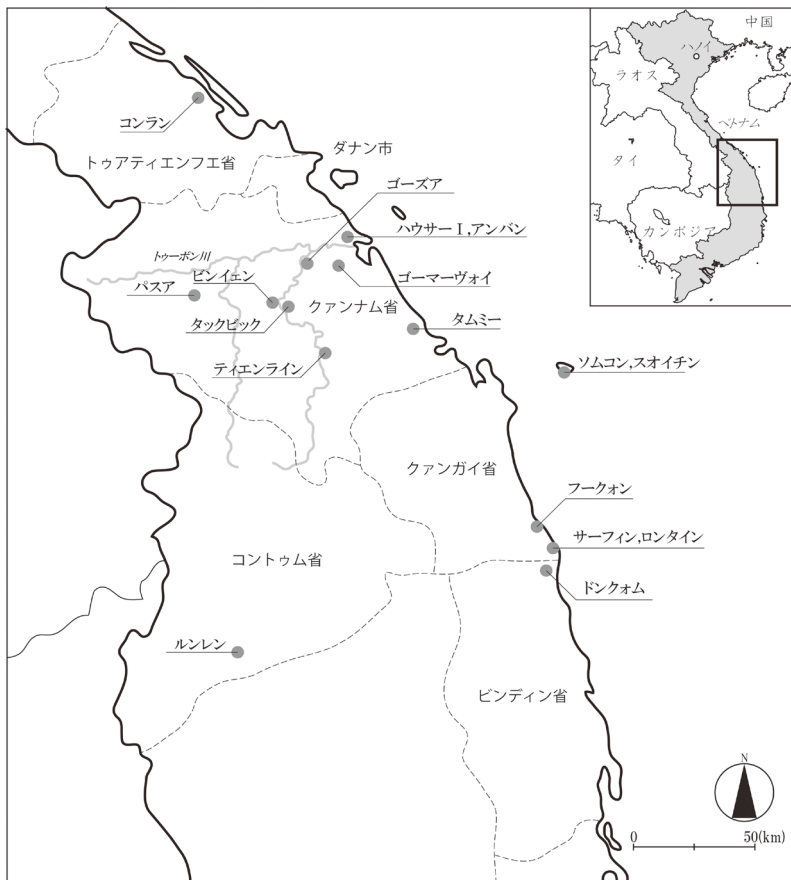


図2 対象地域と遺跡

現在、東南アジア地域において土器棺が集中して確認される地域は南シナ海沿岸のベトナム中部である。特にトゥアティエンフエ Thua Thien Hue 省、クアンナム Quang Nam 省、クアンガイ Quang Ngai 省、ビンディン Binh Dinh 省、コントゥム Kon Tum 省で確認される。また、この地域の平野部は、北はダナン Da Nang 市・クアンナム省とトゥアティエンフエ省との間の山地、南はクアンナム省とクアンガイ省との間の山地、西は西部高原（タイグエン Tay Ngyuen）地域によって3つに分断されている。また、ルンレン Lung Leng 遺跡のみ内陸部の西部高原に位置している。

4-2. 主な土器棺出土遺跡における出土状況

本論で扱う遺跡は、16遺跡ある。ベトナムの土器棺墓遺跡の発掘では、墓坑が確認されることは稀である。なぜなら遺構という概念が重要視されておらず、また砂丘上の遺跡などの土では墓坑を確認することが非常に難しいからである。本論で扱う遺跡の内、墓坑が確認されたのはアンバン An Bang 遺跡、ビンイエー Binh Yen 遺跡のみである。さらに人骨の残存状況は非常に悪いため、人骨が出土するのは稀である。

本項では発掘調査及び出土状況が比較的明確なものについて触れ、土器棺の出土状況を紹介する。また、本文中で土器棺の個体識別に用いる M は墓を意味するベトナム語の Mo の頭文字であり、アンバン遺跡で用いられる C は甕を意味する Chum の頭文字である。

・コンラン Cong Rang 遺跡（トゥアティエンフエ省）【図3】

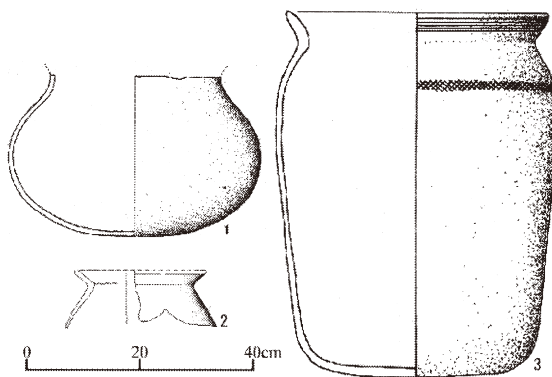


図3 コンラン遺跡出土土器棺：1. M110、2. M182、3. M124 (Bui Van Liem et al. 2008 を改変)

本論で扱う地域の中で北端に位置する遺跡である。海岸から約15km 内陸側の丘に位置する。遺跡の面積は5000㎡で、現代も墓域として利用されている。1987年に発見され、その後数回試掘が行われたが、2002年に総面積は2300㎡の大規模な発掘調査が行われた。埋葬は219基が確認され、うち213基が土器棺墓、6基が土坑墓であった。

報告者によると、コンラン遺跡の土器棺は形式的に4種類に分けられるという。

Hình trụ (柱形)、Hình trung (卵形)、Giữa hình trụ và hình trung (柱形と卵形の中間)、Hình cau (球形)、の4種である。また土器棺及び蓋には様々な種類の文様、調整痕が確認される。とくに土器棺には、叩き痕が肩部の周囲にあるもの、全体に縄文が施されるものなどがある。

土器棺の周囲からは、供献と思われる土器が出土した。また、土器棺の中からも土器、鉄器、装飾品が出土した。人骨は確認されなかったが、多くの炭化物が土器棺の内外で確認された。装

飾品に関しては、有角状耳飾4点、双獣頭型耳飾が1点、134点の貴石ビーズや37点のガラス製ビーズなどが出土した。鉄器は103点が出土した。

コンラン遺跡の年代として、報告者は2500～2000BPという見解を示している。2002年の調査では20の炭化物サンプリングから4つのサンプリングを抽出し、放射性炭素年代の測定を行い、以下の値が出ている。2490±70BP、2630±60BP、2770±65BP、3310±55BP（ベトナム考古学院・年代確定実験室 Phong Thi nghiem va Xac dinh nien dai, Vien Khao co hoc）（Bui Van Liem et al. 2008）

・アンバン An Bang 遺跡（クアンナム省）【図4】

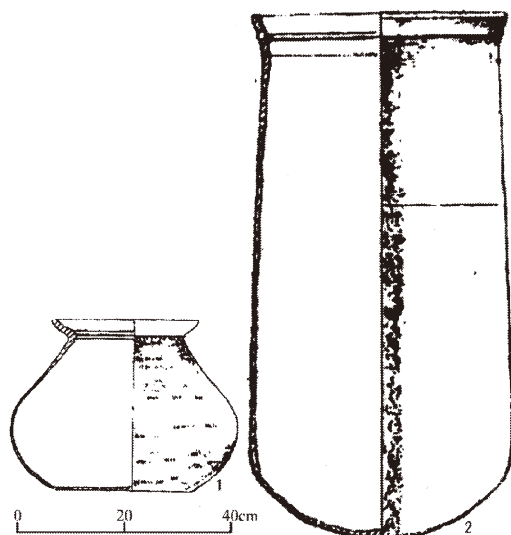


図4 アンバン遺跡出土土器棺：1. C2、2. C6（Nishimura 2004 を改変）

1989年に発見、試掘が行われた。3 m²の試掘坑から、帽子形の蓋を持ち円筒型の胴部に丸底を呈す土器棺が2基出土した。副葬品として鉄器、ネフライト製有角状耳飾が出土した。1995年には本発掘が行われ、26 m²から16基の土器棺が検出された。

発掘により土器棺を埋置するための墓坑が確認された。土器棺は同じ深さで埋納されていないが、切りあてはない。一つのピットから、2基の土器棺が出土することもあった。以上より報告者はアンバン遺跡の使用年数は長期間ではないという見解を示している。

第16号墓の口縁部付近から出土した炭化物から、放射性炭素年代による2260±90BPという測定値が出ている（Lam My Dung 1998）。

・ゴーズア Go Dua 遺跡（クアンナム省）【図5】

トゥーボン川流域に立地し、1999年にハノイ国家大学により発掘が行われた。16 m²の発掘坑で6基の土器棺墓が検出された。6基のうち5基が入れ子状の土器棺という現時点では類を見ない埋葬形態である。

いずれの土器棺も筒形の胴部と丸底を持つ。外側の土器棺の高さは約1 m、直径は60 cm以上。内側の土器棺は帽子形の蓋を持つ。土器棺には土製紡錘車（M1・2）、青銅皿（M1）、鉄器（M1・2・3・4・5・6）、石製有角状耳飾（M2）、ガラス製ビーズ（M1～6）などが副葬されている。また前漢末期の細線式獣帯鏡も副葬品として出土した（M5）。

報告者は、副葬品の細線式獣帯鏡よりゴーズア遺跡の年代は紀元頃と報告している（Lam My Dung et al. 2001）。

・ゴーマーヴォイ Go Ma Voi 遺跡（クアンナム省）【図6】

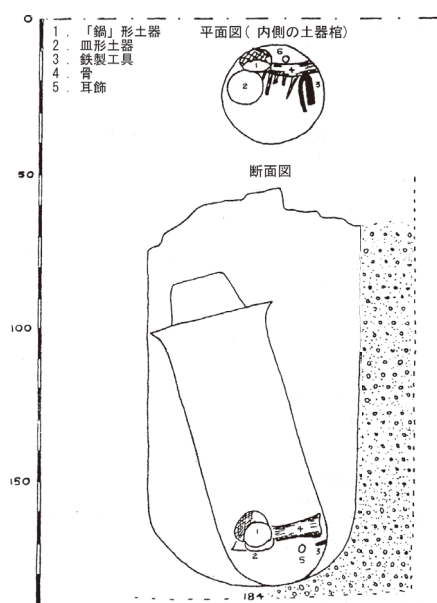


図5 ゴーマーヴォイ遺跡 M2 土器棺出土状況
(Lam My Dung et al. 2001 を改変)

1998年に遺跡付近の住民により発見され、1999年にはハノイ国家大学が発掘を行い、2000年にはドイツ人考古学者も参加し発掘調査が行われた。1998年には16㎡の試掘坑より3基の土器棺墓、1999年には83.25㎡の発掘坑から11基の土器棺墓、3基の土坑墓、そして2000年には総面積59㎡の発掘坑から6基の土器棺墓が検出された。報告者によるとこの遺跡の土器棺の大多数は、外反する口縁、くびれた頸部、張り出した肩、卵型の胴部、という形態である (Reinecke et al. 2002)。山形氏は胴部の特徴から本遺跡の土器棺を「卵形甕」と称し、肩部の張り出しがなくなると長胴甕の形態に近づくと見なして、土器棺の時間的変遷を考えている⁽⁶⁾。

副葬品として土器、装飾品、そして鉄器と青銅器が出土した。装飾品は、ネフライト製・土製・ガラス製の有角塊状耳飾、ネフライト製塊状耳飾、貴石製・ガラス製・金製のビーズである。金属器は、鉄器よりも青銅器の方が多い。本遺跡調査以前はサーフィン文化の遺跡で出土する金属器は鉄器が大半だったが、ゴーマーヴォイ遺跡は青銅器の点数が鉄器を上回る。鉄器は23点が出土し、そ

副葬品として土器、装飾品、そして鉄器と青銅器が出土した。装飾品は、ネフライト製・土製・ガラス製の

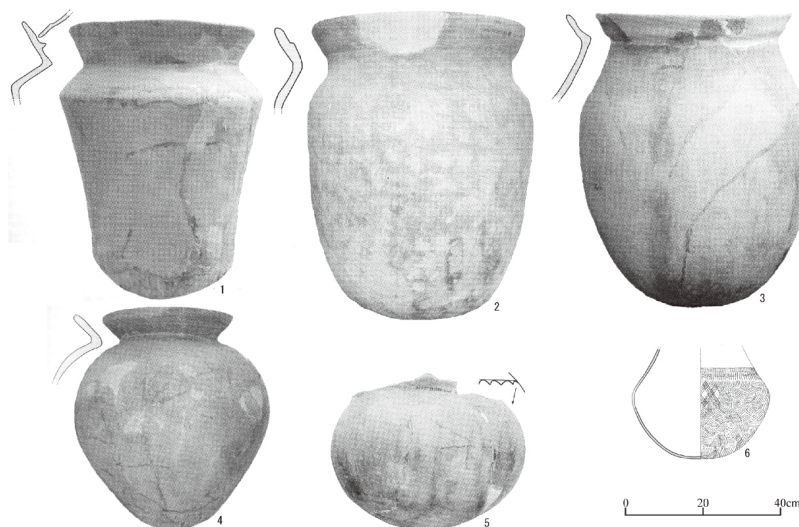


図6 ゴーマーヴォイ遺跡出土土器棺：1. H4M1 2. 525-S92 3. H3M6 4. H5M2 5. 590-S137 6. H2M2
(Reinecke et al. 2002 を改変)

の内訳は、斧が10点、刀子3点、槍先2点、鏝2点、短剣・鍬・移植ごて、と報告されている。一方青銅器は29点が出土し、その内訳は斧21点、槍先6点、不明が2点である。また、銅柄鉄斧も出土した (Reinecke et al. 2002)。

・ビンイェン Binh Yen 遺跡 (クアンナム省) 【図7】

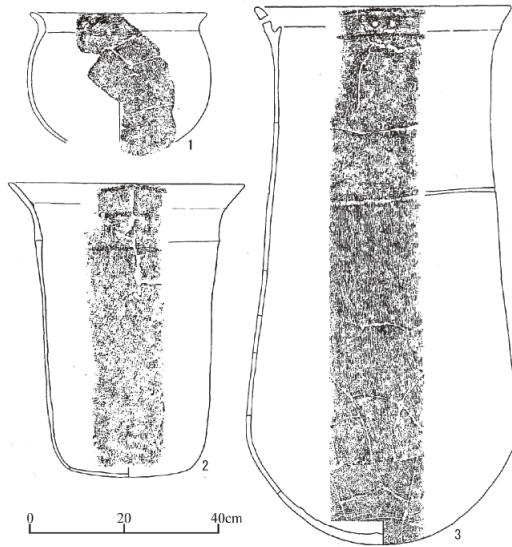


図7 ビンイェン遺跡出土土器棺:1. M1b、2. M2、3. M7 (Yamagata 2006 を改変)

1998年にホーチミン市社会科学院考古学研究センター⁽⁷⁾、山形真理子、クアンナム省博物館の共同発掘が行われた。36㎡の発掘坑 H1 から1基、35㎡の発掘坑 H2 から8基の土器棺が出土した。H2の土器棺のうち3号墓 (M3) は完全に崩壊しているため復元は不可能。H2で出土した土器棺は8基中7基が長胴の甕と帽子形の蓋という組み合わせである。1b号墓 (M1b) は縄蓆文の広口壺を甕とし、浅鉢を蓋としている。

H2の7号墓 (M7) は、他の土器棺墓に比べ出土深度が深い。土器棺の口縁部内側には蓋受けのタガ (突帯) が巡り、口縁に2個1対、総計4対の孔を持つ。これらの特徴は他の6

基にはなく、古い特徴と考えられる⁽⁸⁾。

土器棺墓からは副葬品として土器、鉄器、有角玦状耳飾、玦状耳飾、ビーズ、小型前漢鏡が出土した。また60代男性の人骨が7号墓 (M7) から出土した。遺物の内容から判断すると、H2の土器棺はサーフィン文化の最終段階に近い時期であり、H1の土器棺はH2の土器棺に先行する。ただし、H1の土器棺は埋置後に洪水により破損したとみられるため、蓋しか残存せず甕の形態は不明である。ビンイェン遺跡の年代は、H2M7出土の日光鏡より紀元前1世紀中半以降と推測できる (Yamagata 2006)。

・ロンタイン Long Thanh 遺跡: クアンガイ省 【図8】

1909年、フランス人税関監査官ヴィネにより発見された。ベトナム戦争終結後の1976～1978年にはベトナム人研究者による調査が行われた。計3次の発掘で出土した土器棺の総数は20基にのぼる (Vu Cong Quy 1991)。

1977年次の発掘では総面積186㎡ (発掘坑 H1、H2) が調査された。発掘坑 H2には居住層が確認され、その下層から土器棺墓15基が出土した (Chu Van Tan et al. 1978)。土器棺墓はいずれも副葬品を伴う。その内 M7号墓には玦状耳飾、有角の輪、管玉などの石製装身具22点、土器5点が副葬されていた。青銅器などの金属器は出土していないが青銅器時代の早期の遺跡とされて

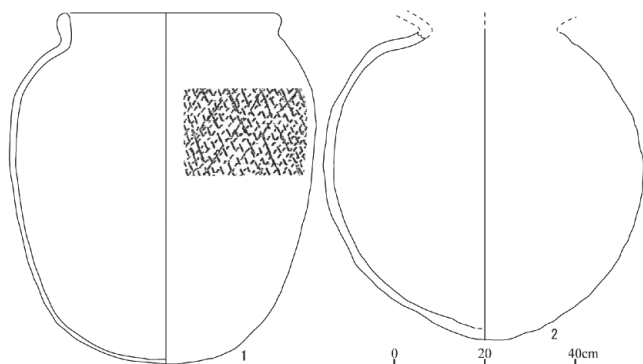


図8 ロンタイン遺跡出土土器棺：
1. M4、2. M1 (Chu Van Tan et al.
1978を再トレース)

いる。放射性炭素年代（未補正）は $1420 \pm 40\text{BC}$ (Bln-1972)、 $925 \pm 60\text{BC}$ (Bln-2096) の値が出た（山形2007）。

4-3. 土器棺出土遺跡の年代観

ベトナムでは土器編年が完成しておらず、土器を通じて詳細な相対年代が決定できるという状況ではない。したがって、遺跡の年代観は放射性炭素年代に頼らざるを得ない状況である。参考として表1に各遺跡の放射性炭素年代の値を示した。

		BC1000BC500BC100 0																		
		3400	3300	3200	3100	3000	2900	2800	2700	2600	2500	2400	2300	2200	2100	2000	1900	1800	1700	
リーソン島	ソムオック																			1910±60BP【uncal】
	スオイチン																			紀元前1〜2世紀、山形はそれ以降
コントウム	ルンレン																			1740-1450calBC、3220±105BP、01LLHC2L6M4
	ルンレン																			1600-1320calBC、3110±80BP、01LLHC2L6M5
	ルンレン																			1610-1390calBC、3120±85BP、01LLHC12L7M4L3
	ルンレン																			200calBC-10calAD、2020±65BP、01LLH5L4M1
トゥアティエン フェ	コンラン																			770-430calBC、2310±65BP、01LLH17L4M2
	コンラン																			2490±70BP【uncal】
	コンラン																			2630±60BP【uncal】
	コンラン																			2770±65BP【uncal】
クアンナム	ティエンライン																			3310±55BP【uncal】
	タックビック																			BC200-BC300
	タムミー																			2550±120BP【uncal】報告者はBC500
	バスア																			2500-2300BP(KCH1977-4)【uncal】
	アンバン																			紀元前1千年紀後半
	ハウサーⅠ																			2260±90BP【uncal】、16号墓口縁部付近の炭化物
	ゴーマーヴォイ																			紀元前1世紀から紀元後2世紀
	ゴーズア																			BC500-BC200cal.
ビンイェン																			紀元頃	
ロンタイン	ロンタイン																			紀元前1世紀中半以降
	ロンタイン																			1420±40BC(Bln-1972)【uncal】
	ロンタイン																			925±60BC (Bin-2096)【uncal】
	ドンクオム																			フークオン遺跡と同時期

表1 各遺跡の放射性炭素年代（右列の cal は校正済み、uncal は未校正）

しかし副葬品で漢鏡や銅銭が出土した場合は年代観の判断材料になる。本論で扱う遺跡のうち、漢鏡が出土した遺跡は、ゴーズア遺跡、ビンイェン遺跡である。銅銭が出土したのはハウサー I 遺跡（五銖銭、王莽銭）である。以上の遺物からゴーズア遺跡は紀元前後、ビンイェン遺跡は紀元前1世紀中半以降、ハウサー I 遺跡は副葬品の五銖銭、王莽銭から紀元前1世紀から紀元後2世紀という年代が考えられている。

5. 形態分類

5-1. 形態に基づく大別基準

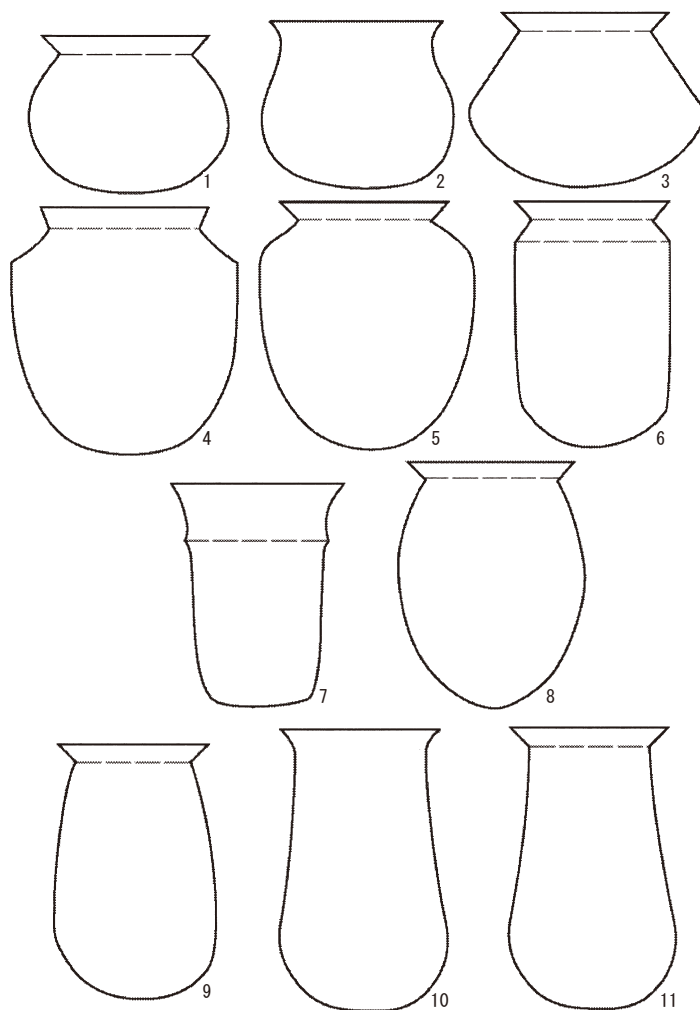


図9 各形態模式図

中部から出土した土器棺の総数は696個体であるが、現時点でベトナムの発掘報告は土器棺に限らず十分ではなく、出土したすべての土器棺の実測図が公表されているわけではない。むしろ実測図が存在する土器棺の方が少ない。本論では、報告書に公表されている図と筆者の実測図、計112個体を用いて分類を行い、土器棺の形態は次の5つの形態に大別できた。

・広口壺形土器棺【図9-1～3】

広口無頸丸底壺を指す。

・有肩土器棺【図9-4～6】

口縁部下の胴部上位に明確な張り出し部（肩部）を持つもの。

・有稜深鉢形土器棺【図9-7】

他の甕棺に比べ平底で、口縁が広がり胴部上位に稜を持つ。

・卵形土器棺【図9-8】

口縁部と胴部の間が明確に括れ、胴部は丸く膨らみ、尖底気味である。

・長胴形土器棺【図9-9～11】

長胴で胴下位に最大径がある。

以上の形態大別のうち、有稜深鉢形土器棺と卵形土器棺を除く3形態は細別が可能である。

・広口壺形土器棺

以下の3形態に細別可能である。

形態1：胴部が球形を呈し、口縁部と胴部の間が明確に括れる【図9-1】

形態2：胴部は球形を呈し、口縁部と胴部の間が明確に括れない【図9-2】

形態3：胴部中位で屈曲し、口縁部と胴部の間が明確に括れる【図9-3】

・有肩土器棺

以下の3形態に細別可能である。

形態4：口縁下が明確に括れ肩部に稜が生じ、胴部は丸みを帯びる【図9-4】

形態5：口縁下が明確に括れ肩部に稜は生じず、胴部は丸みを帯びる【図9-5】

形態6：口縁下が明確に括れ肩部に稜が生じ、胴部は寸胴を呈す【図9-6】

・長胴形土器棺

以下の3形態に細別可能である。

形態9：頸部が明確に括れ、胴部は底部に向かってふくらみながら広がる【図9-9】

形態10：頸部が明確に括れず、胴部は底部に向かって内側に凹みながら、または直線的に広がる【図9-10】

形態11：頸部が明確に括れ、胴部は底部に向かって内側に凹みながら、あるいは直線的に広がる【図9-11】

・有稜深鉢形土器棺に関しては形態7【図9-7】、卵形土器棺に関しては形態8【図9-8】とする

5-2. 各遺跡からの出土状況

5-1の分類に基づいた遺跡ごとの各形態出土個体数は【表2】の通りである。

広口壺形土器棺は、ソムオック遺跡とスオイチン遺跡を除き、必ず他の形態の土器棺と共存している。また、大半の遺跡で広口壺形土器棺の出土数が他の形態の土器棺の合計数の半数以下になる。つまり、広口壺型土器棺は遺跡から出土する土器棺の主体を成す形態にならない。












形態名	広口壺形土器棺			有肩壺棺			有稜深鉢形壺棺	卵形壺棺	長胴形壺棺			不明	各遺跡の壺棺総数	種類
細分形態名	形態1	形態2	形態3	形態4	形態5	形態6	形態7	形態8	形態9	形態10	形態11			
模式図														
遺跡名														
コンラン		9				141		10				52	212	3
ハウサー I	2		1			4			2			1	10	4
アンパン			1							15			16	2
ゴーズア										11			11	1
ビンイェン	1						1			5		2	9	3
タムミー		2				21			1				24	3
タックピック								1					1	1
バスア	2	1				1			1				5	4
ゴーマーヴォイ	2		1	11	2	1		4				2	23	6
ティエンライン										2		1	3	1
ソムオック			1										1	1
スオイチン	5		1										6	2
フークオン								1			1	118	120	2
ロンタイン	2				2							16	20	2
ドンクオム			4				46						50	2
ルンレン	1							1				183	185	3
合計(細分)	15	12	9	11	4	168	47	17	4	33	1	375	696	
合計	36			183			47	17	39					

表2 各形態出土個体数

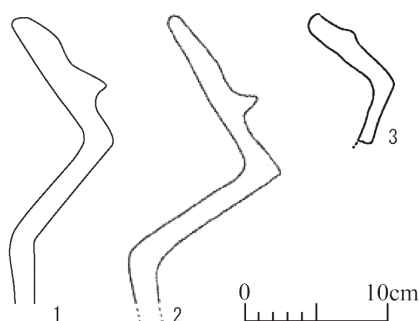


図10 形態6の口縁部に見られるタガ：1. タムミー (M3) 2. ゴーマーヴォイ (M1) 3. コンラン (M200) (1.Trinh Can et al. 1977 改変 3. Bui Van Liem et al. 2008)

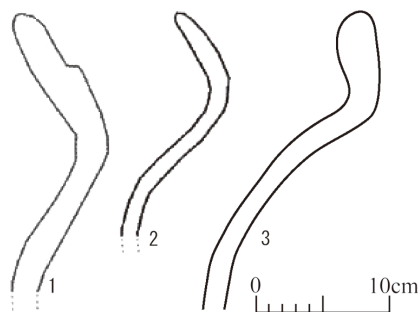


図11 形態5の口縁部：1. ゴーマーヴォイ (525-S92) 2. ゴーマーヴォイ (545-S107) 3. ロンタイン (M4)

有肩土器棺では、形態6がタムミー遺跡、コンラン遺跡で多数出土し両遺跡の主体を成す。その他に3遺跡で1～4個体が確認される。各遺跡では細部に次のような差異が見られる。コンラン遺跡では口縁部外面に数条の沈線が廻り、口縁部断面形が凸レンズ状に肥大する傾向がある。また、肩の張り出し方も緩やかである【図3-3】。一方タムミー、ハウサー I、ゴーマーヴォイ遺跡では、口縁部の沈線や肥大などは見られず、肩部の張り出しも明瞭で稜を生ずる。タムミー、ゴーマーヴォイ、コンラン遺跡では蓋受けのタガを持つ土器棺が確認される【図10】。タガの有無は時間差と考えられる。

形態4はゴーマーヴォイ遺跡のみで出土しており(11個体)、図を比較したが明確な差は見られない。形態5はゴーマーヴォイ、ロンタイン遺跡で出土しており(各2個体)ゴーマーヴォイ遺跡の土器棺は口縁部が外反し、一方は蓋受けと思しき段が見られ【図11-1】、ロンタイン遺跡の2つのうち1個体の口縁部は直立する【図11-3】。

有稜深鉢形土器棺は、ビンイェン遺跡の1個体を除きすべてドンクオム遺跡から出土している。同遺跡では全50個体中46個体を占める。

卵形土器棺はコンラン遺跡で10個体の出土が確認されている。しかし同遺跡では有肩土器棺の形態6が141個体出土しているため主体を成す形態ではない。

長胴形土器棺は、細分した3形態は同一遺跡において共存しない。また形態11が南域のフーコン遺跡で1個体しか確認されておらず、形態9、10はすべてクアンナム省で出土する。出土地域が重なるということは、形態9・10の間に時間差が存在する可能性を示唆する。なお3形態のうち最も多いのは形態10である。

各遺跡の傾向として、多種に及ぶ形態が確認される遺跡と、一種類の土器棺が圧倒的多数を占める遺跡がある。例えばゴーマーヴォイ遺跡は最も多様で6種類の形態が確認されるのに対し、ゴーズア、タックビク、ティエンライン、ソムオックでは1種類が確認されるだけである。ただし、ゴーズア遺跡以外は各遺跡1～2個体しか出土していない。また、ゴーマーヴォイ遺跡の6種類はすべて長胴形・有稜深鉢形土器棺以外の形態である。

6. 型式編年

形態6、7、10はまとまった資料数があるため、型式編年の検討が可能である。

形態6に関して、タガがつくものは古い特徴と考えられるため次第にタガが消滅すると考えるのが妥当であろう。形態6には、イ) タガの有無、ロ) 肩部が屈曲あるいは丸みを帯びる、ハ) 口縁部断面形の凸レンズ状肥大化の有無、の3要素が存在する。以上を考慮し変遷を追ったのが図12である。まずタガを持ち肩部が強く屈曲する型式【図12-1・2】からタガが小さくなり【図12-3】、やがてタガは消滅する【図12-4・5】。その後肩部が丸みを帯びはじめ【図12-6・7】、口縁部断面形は凸レンズ状に肥大する【図12-8・9】。最終的には肩部の稜線も消えて丸みを帯びたラインになる。以上より、形態6は1.) タガがあり肩部に稜がある型式【図12-1～3】、2.) タガがなく肩部にやや稜線がある型式【図12-4～6】、3.) タガがなく口縁部が肥大し肩部の稜線がない型式【図12-7～10】、の3型式を設定できる。

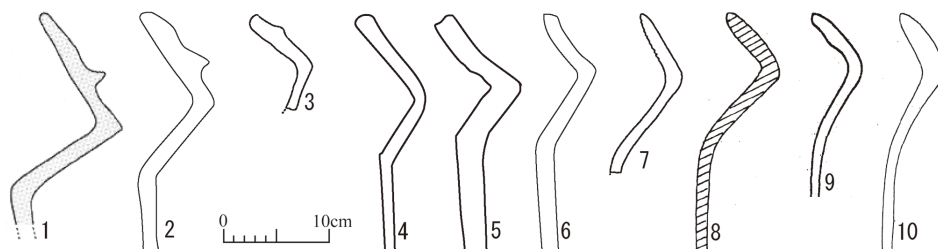


図12 形態6・口縁部断面形の推移 1: ゴーマーヴォイ (M1)、2・4・6: タムミー (M3・M7・M2)、5: ハウサーI (M7) 3・7～10: コンラン (M200・M140・M109・M19・M124) (1: Reinecke et al. 2002を改変、2・4・6: Trinh Can et al. 1977を改変、5: Ngo Si Hong et al. 1991を改変、3・7～10: Bui Van Liem et al. 2008を改変)

形態7も口縁部下の屈曲部内面にタガを明確に確認できる個体と、できない個体があるが、形態6と同様に次第にタガが消滅すると考えるのが妥当であろう。形態7の型式は、イ) タガの有

無、ロ) タガ下の段(以下、段とする)の有無、ハ) 外面胴部上位の稜の位置、以上の3要素によって決定される。これらを考慮し変遷を追ったものが図13である。まずタガ、段、外面の稜が明瞭であるもの【図13-1・2】から、タガと段が上に移動【図13-3・4】する。そしてタガと段がともに退化するもの【図13-5a～8a】と、口縁部は外湾し段が消え外面の稜が口縁部下まで上がるもの【図13-5b・6b】の2系統に分かれる。以上より1.) タガ、段、胴部上位の稜が明瞭な型式【図13-1・2】、2.) タガと段が上に上がる型式【図13-3・4】、3a.) タガ、段、外面の稜が退化する型式【図13-5a～8a】3b.) 口縁部が外湾し、胴部の稜線が口縁部直下にまで上がる型式【図13-5b・6b】、以上4型式を設定できる。

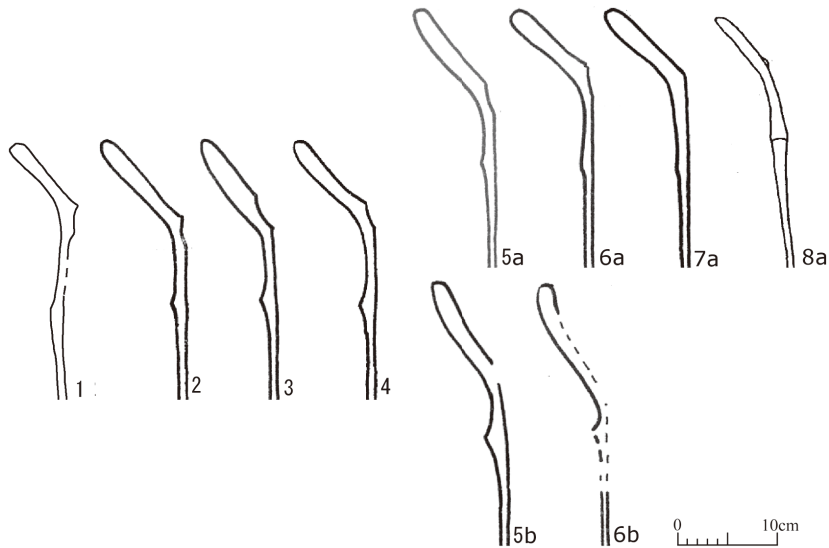


図13 形態7・口縁部断面形の推移 1～4・5a～7a・5b・6b: コンラン (M3・M5・M22・M11・M15・M8・M2・M9・M12)、8a: ビンイエン (M2) (1: 筆者実測、2～4・5a～7a・5b・6b: Pham Thi Ninh et al. 2003を改変、8a: Yamagata 2006を改変)

形態10の型式変遷を組むにあたり、ビンイエン遺跡の事例よりタガのある型式がない型式より古い様相を示すことを前提とする。形態10では、イ) 明瞭なタガを持つ、ロ) 口縁内面に凹帯を持つ、ハ) 口縁内面に段・稜を持つ、という3つの要素が確認される。これらについて前述の前

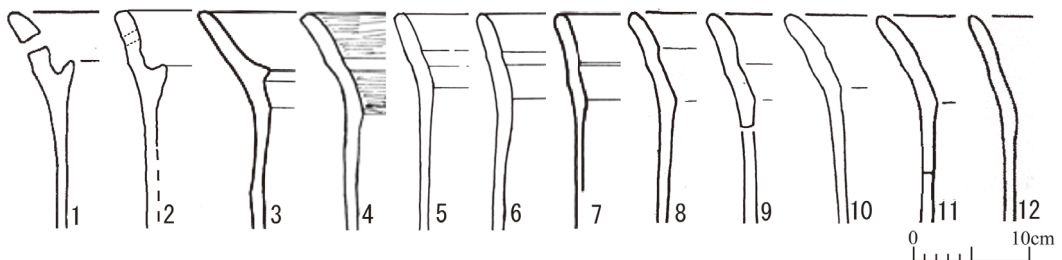


図14 形態10・口縁部断面形の推移 1・10～12: ビンイエン (M7・M4・M1a・M6)、2～7: アンバン (C14・C4・C7・C10・C6・C1)、8・9: ティエンライン (M3・M2) (1・10～12: Yamagata2006を改変、2: 発表者実測、3～7: 西村昌也氏提供・発表者改変、8・9: 山形眞理子氏提供・発表者改変)

提を元に変遷を追った【図14】。まず明瞭なタガと穿孔を持つ型式があるが【図14-1～3】次第にタガが退化し下を向く【図14-3】。その後蓋受けの機能を口縁部内面を廻る幅1.3cm前後の凹帯が担い【図14-4～6】、やがて凹帯も痕跡器官として段から稜線へと変化し【図14-7～11】最終的にそれらも消滅する【図14-12】。以上より形態10は1.) 口縁部内面にタガを持つ型式【図14-1～3】、2.) 口縁部内面に凹帯を持つ型式【図14-4～6】、3.) 口縁部内面に段・稜を持つ型式【図14-7～11】、4.) 口縁部内面に何も見られない型式【図14-12】、以上4型式を設定できる。

7. 形態の特性

7-1. 形態の地域性

有肩土器棺の形態4・5・6に出土状況の差異が見られる。それらは各形態の地域性と解釈できる。形態4は、ゴーマーヴォイ遺跡のみで確認され、さらに各個体の差異も小さいため限られた場所、短期間での使用が考えられる。形態5に関しては出土数が少ないため、地域性に関してはわかりかねる。形態6はコンラン遺跡の141個体が出土総数の大半を占めている。またコンラン遺跡よりも数は少ないものの、タムミー遺跡で出土した土器棺の9割弱が形態6である。さらに、数は少ないもののハウサーI遺跡、パスア遺跡、ゴーマヴォイ遺跡でも確認される。したがって形態6はトゥアティエンフエ省からクアンナム省の沿岸部の地域性を示すと考えられる。

有稜深鉢形土器棺の形態7はドンクォム遺跡で46個体が確認される以外はビンイェン遺跡の長胴形土器棺5個体と共に出土した1個体しか例がない。また、ドンクォム遺跡内においても大半がこの形態である。この出土事例は、有稜深鉢形土器棺が中部圏内でも南方の地域性を示唆すると考えられる。

長胴形土器棺の形態10にも地域性が現れている。形態10は、アンバン・ゴーズア・ビンイェン・ティエンライン遺跡で出土している。これらの遺跡の共通点はトゥーボン川流域に位置するという点である。また、形態9も同様にトゥーボン川流域に位置する遺跡である。形態11を除く長胴形土器棺は、トゥーボン川流域の地域性を示唆すると考えられる。

7-2. 広口壺形土器棺の特徴

広口壺形土器棺の形態1は中部圏に遍在しているのが一つの特徴である。ただし、各個体は施文の有無やサイズの差が大きいため、さらに細かく分類することが可能であろう。形態3も同様に、少数であるため判断しづらいが全域に分布していると言える。形態2に関してはコンラン遺跡の出土数が突出して多いため中部圏の北域の形態と考えられる。広口壺形土器棺全体で見ると、ほぼすべての遺跡で出土する。しかし広口壺形土器棺しか出土しないという例がソムオック、スオイチン遺跡以外で見られない事例や、1つの遺跡から出土する土器棺の形態の主体とならない事例は何を意味するのだろうか。

広口壺形土器棺は他の形態に比べサイズが小さく、数量も少ないため、主体の形態の土器棺とは異なる葬法に用いられたと考えられる。つまり、広口壺形土器棺は各墓域を形成した人々の中で

少数かつ主体になりえなかった故人、例えば小児のために用いられたと考えるのが妥当であろう。

クァンガイ省沖合のリーソン島に位置するソムオック遺跡とスオイチン遺跡から出土した土器棺だが、これらはすべて広口壺形である。またソムオック遺跡では検出された墓全7基中2基の残存状況が良好であったが、うち1基が土器棺墓（M5）であり、納められていたのは3、4歳児の骨であった。それらが解剖学的位置を保っておらず人為的に配置されていたため、同遺跡の甕棺葬は2次葬と考えられている。もう1基は方形土坑墓で成人男女の合葬であった。一方、スオイチン遺跡の6基の土器棺墓も小児の2次葬であった。

以上より、広口壺形土器棺は成人用ではなく、小児用または2次葬用に用いる形態であったと考えられる。

7. おわりに

本論ではベトナム中部という限定された地域を対象としたが、その中でも土器棺の形態にバリエーションが生じ、それらが地域差を示していることが明らかとなった。さらに形態6・7・10の型式的変遷を提示できた。しかしこの型式的変遷を通じての土器棺墓地形成や各土器棺墓遺跡の前後関係を論ずるにはまだ不十分である。

さらに土器棺と副葬土器や日常土器の関連性についてはまだ明らかになっていない。東南アジアの土器棺葬の発生と発展を理解するには、副葬土器と日常土器の土器アセンブリッジからのアプローチが必須である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり次の方々に資料提供及びご教授を頂きました。心より御礼申し上げます。後藤直氏、西村昌也氏、山形眞理子氏（50音順）

注

- (1) ベトナムで使用されている埋葬用の土器を示す用語は Mo chum、Mo vo、Mo noi であるが、的確な日本語訳がなく一様に甕棺と訳される。しかしこの3種は2・4項で紹介するように形式的に別の土器である。よって、本稿では甕棺ではなく土器棺という名称を用いる。
- (2) 最大径を指すと考えられる。
- (3) 同上。
- (4) 引用元の表記で「型」となっていたところを「形」に直した。
- (5) 文献中で「長径と幅」と記されていたが、高さと同部径と考えられるため修正した。(Nguyen Chieu2010)
- (6) 山形氏の御教示による。
- (7) 現在はベトナム南部持続発展院考古学研究センターである。
- (8) 山形氏の意見による。

引用参考文献

<日本語文献>

- グエン・チウ (NGUYEN CHIEU), 2010. ベトナム中部の初期金属器時代—サーフィン文化の概要—, *海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ*, 14-29 高志書院.
- 鈴木朋美, 2009. ベトナム東南部ドンナイ川流域出土甕棺の検討, *溯航*, 28, 21-35. 早稲田大学文学研究科文研考古誌.
- 田中和彦, 2002「フィリピンの甕棺葬」東南アジア考古学会国際シンポジウム「アジアの甕棺墓—初期歴史時代の交流—」発表資料集: 48-57.
- 山形真理子, 2007. ベトナムの甕棺葬—その起源に関する予察—, *早稲田大学大学院文学研究科紀要*, 52, 97-115. 早稲田大学文学研究科.
- 山形真理子, 2010a. ベトナムの先史文化と海域交流, *海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ*, 30-50 高志書院.
- 山形真理子, 2010b. 「サーフィン—カラナイ土器伝統」再考, *南海を巡る考古学*, 95-129 同成社.
- 山形真理子, ベトナムの土器棺葬, 未公開.

<外国語文献>

略語凡例

- AP = *Asian Perspectives*, Honolulu.
- BEFEO = *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, Paris.
- BIPPA = *Bullerin of the Indo-Pacific Prehistory Association Bulletin*, Canberra.
- BTLNVNTBKH = *Bao Tang Lich Su Viet Nam Thong Bao Khoa Hoc*, Ha Noi.
- JSAA = *Journal of Southeast Asian Archaeology* 東南アジア考古学, 東京.
- KCH = *Khao Co Hoc*, Ha Noi.
- NPHKCHOMN = *Nhung Phat Hien Khao Co Hoc o mien nam*, Thanh Pho Ho Chi Minh.
- NPHMVKCH = *Nhung Phat Hien Moi ve Khao Co Hoc*, Ha Noi.
- NXB = Nha Xuat Ban (出版社)
- VBTLSVNTBKH = *Vien Bao Tang Lich Su Viet Nam Thong Bao Khoa Hoc*, Ha Noi.
- BELLWOOD, P., 1997. *Prehistory of Indo-Malaysian Archipelago(Revised edition)*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Bui Chi Hoang and Yamagata, M., 2004. Khu di tích Bình Yên và văn hóa Sa Huỳnh ở Quảng Nam. *Mot số vấn đề khảo cổ học ở miền nam Việt Nam*. NXB Khoa Học Xã Hội, Hà Nội. 83-119.
- BUI VAN LIEM, 2008. Khu mộ chum văn hóa Sa Huỳnh Công Rang Xã Hương Chu, Huyện Hương Trà, Tỉnh Thừa Thiên Huế. *Báo cáo khai quật và chỉnh lý Di tích Công Rang lần thứ 3*. 285-295.
- BUI VAN LIEM, 2005. Mộ Tang Lung Leng. *KCH*. 2005(5).15-26.
- BUI VAN LIEM, NGUYEN NGOC QUY, NGUYEN DANG CUONG, TRAN QUY THINH, HA THANG, DANG QUOC TOAN, 2008. *Báo cáo khai quật & chỉnh lý Di tích Công Rang lần thứ 3*. Báo tang lịch sử và cách mạng Thừa Thiên Huế, Thừa Thiên Huế, Việt Nam.
- CHU VAN TAN, DAO LIN CON, 1978. Khai quật di tích Long Thành. *NPHKCHOMN*. 196-224. Viện Khoa Học Xã Hội Tại Thanh Phố Hồ Chí Minh, Thanh Phố Hồ Chí Minh, Việt Nam.
- DANG VAN THANG, VU QUOC HIEN, NGUYEN THI HAU, NGO THE PHONG, NGUYEN KIM DUNG, NGUYEN LAN CUONG, 1998. *Khảo Cổ Học tiền sử và sơ sử thành phố Hồ Chí Minh*. NXB Trẻ thành phố Hồ Chí Minh, Thanh Phố Hồ Chí Minh, Việt Nam.
- DANG VAN THANG, VU QUOC HIEN, 1997. Excavation at Giồng Cà Vò site, Cần Giu District, Hồ Chí Minh City. *JSAA*. 17. 30-44.
- FOX, R.B., 1970. *Tabon Caves*. Manila: Monograph of the National Museum Number 1.

- HA VAN TAN (ed.) 1999 *Khao Co Hoc Viet Nam Tap II Thoi Dai Kim Khi Viet Nam*. Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi.
- LAM THI MY DUNG, 1998. The Sa Huynh Culture in Hoi An. *Southeast Asian Archaeology 1996*. 15-25. Center for Southeast Asian Studies.
- LAM THI MY DUNG, 1998. The Sa Huynh Culture in Hoi An. KloHe, M. J. and de Bruijin T. (eds.) *Southeast Asian Archaeology 1996*. Center for Southeast Asian Studies, Hull: 15-25.
- LAM MY DUNG, NGUYEN CHIEU, HOANG ANH TUAN, 2001. Khai quat Go Dua nam 1999. *KCH. 2001(1)*. 68-80.
- LAM MY DUNG, NGUYEN CHIEU, HOANG ANH TUAN, 2002. Khai quat chua chay Go Dua nam 1999. *Ky Yeu Hoi Thao Khoa Hoc 5 nam nghien cuu va dao tao cua bo mon khao co hoc*. 191-207 NXB Chinh tri quoc gia.
- NGO SI HONG, TRAN QUI THINH, 1991. Khu mo chum Hau Xa, Hoi An (Quang Nam-Da Nang) va nhan thuc moi ve van hoa Sa Huynh. *KCH. 1991(3)*. 64-75.
- NGUYEN KHAC SU, PHAN BINH NGUYEN, 2005. Di Tich Lo Dat Den Va Bep Lung Leng. *KCH. 2005(5)*. 27.
- NGUYEN KHAC SU, TRAN QUY THINH, 2005. Khai Quat Di Chi Lung Leng Tu Lieu Va Nhan Xet. *KCH. 2000(1)*. 15-34.
- NISHIMURA MASANARI, 2004. Loai hinh hoc cua gom o khu mo tang An Bang. *Van Hoa Sa Huynh o Hoi An -Ky yeu hoi thao khoa hoc-*. 143-155.
- PARMENTIER, H., 1924. Notes d'archéologie indochinoise: VII. Dépôts de jarres à Sa-huynh (Quảng-ngãi, Annam). *BEFEO. 24*. 325-343 Ecole française d'Extreme-Orient.
- PHAM THI NINH, 2010. Boi canh kinh te - xa hoi va cac moi quan he giao luu van hoa Cua cu dan co Sa Huynh. *BTLSVNTBKH. 2009*. 40-56 40-56.
- PHAM THI NINH, 2005. A report on recent excavations on Ly Son Island (Central Vietnam). *BIPPA. 25, 2005 (Taipei papers, volume 3)*. 133-137.
- PHAM THI NINH, 2000. Recent discovery and excavation of Sa Huynh culture site on Ly Son Island (Central Vietnam). *BIPPA. 19, 2000 (Melaka papers, volume 3)*. 61-64.
- PHAM THI NINH, PHAM VU SON, 2003. *Bao cao dieu tra khao sat di tich Dong Cuom (Binh Dinh) va di tich Binh Chau II (Quang Ngai)*. Ha Noi: Vien Khao Co Hoc.
- REINECKE, A., NGUYEN CHIEU, LAM THI MY DUNG, 2002. *Go Ma Voi - Neue Entdeckungen zur Sa-Huynh-Kultur (Nhưng phát hiện mới về văn hóa Sa Huynh)*.
- TRINH CAN, PHAM VAN KINH, 1977. Khai quat khu mo chum Tam My (Quang Nam-Da Nang). *KCH. 1977(4)*. 49-57.
- TRUONG HOANG CHAU, 1991. Di chi Bau Tram (Quang Nam - Da Nang). *VBTLNVNTBKH. 1991*. 80-102. Vien bao tang lich su Viet Nam.
- VU CONG QUY, 1991. *Van Hoa Sa Huynh*. NXB Van Hoa Dan Toc.
- VU QUOC HIEN, 1991. Bai Mo Chum Pa-Xua. *VBTLNVNTBKH. 1991*. 167-179.
- VU QUOC HIEN, 2008. Vai suy nghi; Ve cac di tich mo chum o Dong Nam Bo. *Thong bao khoa hoc -50 nam (1958-2008) Bao tang lich su Viet Nam*. 116-128.
- VU QUOC HIEN, TRUONG DAC CHIEN, 2010. Van Hoa Sa Huynh Suy Nghi Tu Bao Tang Lich Su Viet Nam. *BTLSVNTBKH. 2009*. 32-39.
- YAMAGATA, M., 2006. Chapter17: Inland Sa Huynh Culture along the Thu Bon River Valley in Central Vietnam. *Uncovering Southeast Asia's Past: Selected Papers from the 10th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists*. 168-183. NUS Press.